高等教育研究センター
かわらばん
秋号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第52号

クォーター制を活かす授業デザイン

クォーター制を授業の質向上に活かす

名古屋大学を含む多くの大学で、学年暦のクォーター化が検討されています。クォーター制導入の目的は、学生の国外への送り出しを容易にすることが中心です。しかし、クォーター制への移行により、教員はこれまでの授業設計を大きく見直す必要に直面します。この変化をチャンスと捉え、これまでの授業設計を見直して、学生の学習の質を向上させる工夫が求められています。

つまるところ、長年、日本の大学教育の中心的な問題は学生の学習量の少なさであり、学生を勉強させる教育への転換が求められてきました。これに対してこの間、政策的に進められてきたことは、シラバスの充実、学生調査（ＩＲ）の充実、ＧＰＡの活用、ＣＡＰ制やナンバリングの導入、全学的な教学マネジメント、教育情報の公開など、小道具や周辺領域の拡充でした。こうした制度整備が学生の学習時間の増加に寄与するには、授業の質向上の梃子として活用する工夫が必要です。クォーター制も小道具の１つにとどめず、学生の学習を促進する契機とする工夫を考えたいと思います。

クォーター制を活かす授業デザイン

例として、週２回の授業を８週間で行う場合を考えてみましょう（１科目２単位を維持する移行を想定）。授業時間数はこれまでと変わりませんが、授業の間隔が短くなります。また、授業時間外の課題も集中的に取り組めるものに限られます。

短期集中型の授業は、反復学習が効果的な基礎科目では教育効果が高まる一方、高年次の専門科目、教養科目、研究やプロジェクトに取り組む科目では逆効果となる恐れもあり、教員による工夫が必要です。特に、専門教育において複雑な概念や理論を教える場合は、従来と同じ授業計画では、進行が速すぎて学生がついていけないと感じるかもしれません。

週２回授業を行う場合の工夫の１つとして、授業計画全体をこれまでの半分の８週間で設計した上で、１週間の間の１回目を講義、２回目を演習とする方法があります。学生は講義で新たに獲得した知識を、演習の中で活用・応用することで、より深く学ぶことができます。ただし、講義と演習をセットにするには、演習で取り組む課題や問いを中心に授業の準備を始める必要があります。反転授業を取り入れることに似た授業設計とも言えます。

講義と演習のうち、どちらか一方をＴＡに任せる方法もあります。講義をＴＡに任せれば、教員は演習の準備に集中することができます。学生数が多く、複数のＴＡを活用できる場合は、講義は教員が行い、多人数の学生を少人数のクラスに分けて複数のＴＡで演習を指導することもできます。

ただし、こうした授業設計を行うには、新しいＴＡ制度の整備に加え、各科目をどの学期に配当するか、週２回授業の時間割をどう設計するか、講義や演習を担当するＴＡの育成をどう進めるかなどのカリキュラム開発や制度づくりが不可欠です。高等教育研究センターでは演習を担当するＴＡ向けに、問いのつくりかたや学生中心の少人数授業を運営する方法を指導する科目を開講しています。

セメスター制の長所を振り返る

ところで、北米の大学は、２０１２年時点で７割以上の大学がセメスター制を採用しており、過去20年の間に20％以上増加しています。つまり、トレンドはクォーターからセメスターへです。教員の多くは、セメスター制の方が複雑な概念や理論を教える十分な時間を確保できると考えているようです。

セメスター制に移行したほとんどの大学で、移行前に検討した２つの学年暦の長所と短所をまとめた報告書を公開しています。それによると、クォーター制（ただし、北米のクォーター制は３学期制で１学期は10週間の授業が多い）は、言語学習や数学など反復練習が必要な科目では、短期間で集中的に反復学習を行うため、高い教育効果が得られる長所があると指摘されています。一方、多くの教員は、専門教育を行うにはクォーターは短すぎると感じているようです。新しい理論や概念を獲得し、その活用や応用を議論したり実践したりして、最終的な成果を学期末論文にするには、セメスターの時間が必要という認識です。

こうしたことから、名古屋大学でクォーター制へ移行する際には、授業担当者やカリキュラム委員会等への支援の充実が不可欠であると言えます。

（中島英博）

セミナー案内

第77回客員教授セミナー
「大学のガバナンスと教育改革」
講演者：吉武博道氏（筑波大学）
日　時：2015年11月19日（木）16:00-18:00
場　所：文系総合館５階アクティブラーニングスタジオ
詳細は下記HPをご覧ください
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/151119_yoshitake/
お問合せはinfo@cshe.nagoya-u.ac.jpまで

大学教務実践研究会第３回大会
日　時：2015年12月5日（土）10:00-16:00
場　所：愛知みずほ大学
定　員：140名
詳細および参加申込は下記HPをご覧ください
http://kyoumujissen.wix.com/home
お問合せはkyoumujissen@gamil.comまで

大学教員準備講座2015を実施しました

本年８月３～５日に大学教員準備講座2015を実施しました。大学院共通科目として2012年度から毎年開講されている本講座ですが、今回は本年４月に高等教育研究センターに新設された「アクティブラーニング・スタジオ」が教室となりました。グループワークやディスカッションを多く取り入れ、濃密な３日間でした。2016年度も同様に開催する予定ですので、大学教員職に関心のある大学院生やポスドクにご紹介いただければと思います。

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想をお寄せください
Eメールアドレス　info@cshe.nagoya-u.ac.jp

「EUの高等教育質保証に関するガイドラインが10年ぶりに改訂される」

1. 各国の多様性に配慮した内容

2015年5月に、「欧州高等教育圏質保証に関するガイドライン」の改訂版が、欧州高等教育大臣会合で承認され、その内容が正式に発表されました。

従来のガイドラインは、欧州高等教育大臣会合が2005年に採択したもので、2003年に同会合が行った要請を受けて、主に欧州高等教育質保証協会（ENQA）が取りまとめた提案がベースになりました。ガイドラインの趣旨は、唯一の基準を設けて各々の高等教育機関や評価機関に遵守を求めたり、一律に評価を行うという趣旨ではなく、国・地域間の差異を認めたうえで、共通の質保証基準を設けることです。

その後、EU域内全体に教育の質保証をめぐる状況に進展がみられました。EU域内各国で質保証システムが一定程度整備されていること、学生の学習成果重視の方針が受け入れられてきたこと、国境を越えた大学間の共同学位プログラムも進められていること等です。この状況をふまえて、新たなガイドライン作成の準備が進められてきました。

今回改訂されたガイドラインの目的は、以下のように設定されています。①教授・学習に関する質保証制度のための共通枠組をEU、国、機関の各レベルで設定すること、②欧州高等教育圏内で高等教育の質を保証・改善すること、③国境を越えた相互認証・人の移動を促進することです。

2. 学生中心の教授・学習のあり方を重視

内容は、内部質保証（第1部）、外部質保証（第三者評価、第2部）、外部質保証機関に関する欧州基準（第3部）の3種類が示されています。

第2部と第3部がそれぞれ8項目から7項目に削減・整理されたのに対して、第1部は7項目から10項目へと増えています。第1部は、学習者中心の教授・学習・評価のあり方をいっそう促進する方針を反映した内容になっています。

EU域内には数多くの国が存在し、それぞれ政治制度、高等教育制度、社会・文化的背景を異にしています。そのため、高等教育の質や基準等を、一律に定めることは不適切との認識が示されてきました（2005年版ガイドライン）。多様な関係者が合意できるように、多様な視点を反映した内容にすることが重視されてきました。作成にあたっては、上記のENQAだけでなく、欧州大学協会（EUA）等の高等教育機関や学生団体の連合体、さらに、大学評価団体や経済団体等も参加しており、この面でも多様性が配慮されています。そのためと思われますが、当初からその内容は一般的なものであり、それは今回の改訂版でも踏襲されています。

とはいえ、EU域内では高等教育全般にわたり改革の取り組みは活発です。共通の資格枠組（EQF）の設定、大学間の共同学位プログラムの促進やそれを通じた国境を越えた人の移動の活発化等です。今回のガイドラインもこうした流れを加速する効果が期待されています。

（夏目達也）

Higher Education Glossary
高等教育にまつわる用語集

アカデミック・インテグリティ（学問的誠実性）
Academic Integrity

学問に携わる者に求められる高潔さをアカデミック・インテグリティと言います。インテグリティ（integrity）ですので、高潔さは誠実さ、清廉性、完全性などと言い換えられることもあります。研究倫理よりも広範な概念であり、学問に携わる大学教員、研究者、学生のすべてに適応される用語です。学生のコピペ問題などと連動して、近年注目されています。アカデミック・インテグリティに関する行動規範を定めたり、ハンドブックを提供したりする大学があります。

学生の具体的な行動としては、盗用（剽窃）をしない、実験や調査のデータを捏造しない、レポートの丸写しをしない・させない、カンニングをしない・させない、といったものが挙げられます。各自の知性・能力を適切に披露することが基本です。「見て見ぬ振り」も アカデミック・インテグリティに反する行為です。

重要なことは、なぜこれらの行為をしてはいけないのかです。同じ単位や学位をもらうのに不公平があってはいけないという説明がありますが、もしも全員揃ってカンニングしたらと考えると行き詰まります。「勉強したくてきたのでしょう？」という問いへの答えも「したい人はすればいい」になりかねません。アカデミック・インテグリティは学位の質を担保するものであり、これによって大学も学生にも利益があるのだということを共通理解にする必要があります。また、社会的な意思によって「学問の自由」が保証された大学という学びの場が成立していることから、それにふさわしい社会的責任を果たし、今後の継承を確保するという意味合いが肝要です。

一方で、学生がひとりで何もかも解決しなくてはと思い込んで孤立することがないように、適切な指導や体制も求められます。例えば、友人との議論を通じて考えを深めることを遠慮しないようにシラバス等で予め推奨しておくなどです。とはいえ、明確な線引きやルール化は難しいのも事実です。まずは生き生きとした学問の共同体をつくることが、アカデミック・インテグリティにつながると考えられます。　（齋藤芳子）

読んでおきたいこの1冊
Great Books on University

『世界を変えるエリートは何をどう学んできたのか』

ケン・ベイン著　藤井良江訳
日本実業社　2014年

著者は、有名大の教育・学習センター長を歴任した米国の著名な研究者です。教育実践で成果をあげている大学教員が、授業内外で何をいかに行っているかを分析した前著『ベスト・プロフェッサー』（2004年）があります。

本書は、大卒後に各界で活躍を続ける人々が、大学在学中にいかに学習したか、その内容や特徴は何かを、豊富な事例に基づいて考察しています。とくに彼らの多くが、失敗経験から前向きに学ぶことにより、批判的に思考したり、困難な問題を臨機応変に処理できるようになったことを詳述しています。彼らの多くに共通するのは、「深い学習」を行っていることです。

学生の学習方法は①深い学習、②戦略的な学習、③表面的な学習に大別でき、学生は無意識のうちにどれかを選択しています。①の学生は困難な課題にかじりつき簡単にあきらめない、文章の裏に潜む本質的なものを突き止めようと奮闘する、②や③の学生は試験での好成績を収めることを目的にしており、目的を達成できても自分の考えや行動に学習が影響も与えないと指摘しています。

学生が学業成績などの学習成果を性急に求めること、教員がときに報償を用いてそれを促すことなど、教育場面で見かける日常的な行為が、意図に反して学びを阻害する可能性のあることを教えています。内面から湧く自然な学習動機を大切にして、じっくり課題に取り組ませる必要があることなど、学生の学習支援について多くの示唆を得られる書籍です。　（夏目達也）

高等教育研究センタースタッフ（2015年10月現在）

センター長　水谷 法美　専門領域：海岸・海洋工学
教授　夏目 達也　専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授　中島 英博　専門領域：高等教育マネジメント
准教授　丸山 和昭　専門領域：教育社会学、高等教育論、専門職論
助教　齋藤 芳子　専門領域：科学技術社会論
客員　ジョシ マヘンドラ キショア（インド マハラジャ クリシュナクマリシン バーヴナガル大学）
寶 心浩　（中国 上海外国語大学日本文化経済学院）
深堀 聰子　（国立教育政策研究所高等教育研究部）
吉武 博通　（筑波大学大学院ビジネス科学研究科）
向後 千春　（早稲田大学人間科学学術院）

名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695
E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/